令和８年10月１日 発行


小豆島一日研修（１年次）


附属学校園訪問（１年次）


守られ、育ち合う。


移ろいに輝く

# 香川大学教育学部 附属教職支援開発センター センターニュース

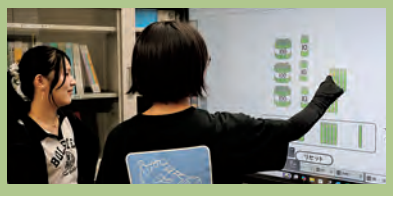
## No.14


未来からの留学生（２年次）


教育実習（３・４年次）





### PICK UP NEWS

### 「冷やし教職支援」初めて、始めました！

ICT活用指導力の向上の一助として、教職支援開発センターに整備している電子黒板や実物投影装置、指導者用デジタル教科書などのICT機器・デジタル教材を「主体的に活用してみる」機会として、2026年度初めて『冷やし教職支援』と銘打った取組を実施しました。教員採用試験の２次試験前の時期（7/24～8/6（平日のみ）の午後）に、面接・模擬授業の直前対策と共に、暑い時期の実施もあり、「涼しく冷やした教職支援センターで、涼しく快適に教員採用試験対策に取り組もう」とのメッセージを込めました。

周知期間が十分とは言えない中での実施でしたが、のべ27名の学生・院生が当センターを訪れ、当センター教員などの指導の下、ICT機器の操作を体験しました。学生からは「こんな授業場面で使えそう」「もっとこんなふうに使えたらいいのに…」などのつぶやきが聞こえると共に、傍らに整備している教科書を手に取りICT機器の操作体験を行っている学生もおり、授業場面の具体イメージを広げながらICT活用について考える学生の様子が伺えました。

教員採用試験対策に留まらず、“開かれた教職支援開発センター”として学生・院生に一層受け止めてもらえるよう、「次は『あったか教職支援』を！」などと、続く企画を練っているところです。

◆センター長あいさつ／令和８年度 附属教職支援開発センター 事業計画／令和７年度 センター日誌 …… 2
［特集］学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動 …… 3
学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動 研究グループ報告 …… 3～5
◆令和７年度 教育実践集中講座 実践報告 …… 6
◆交流教員から見た 学校教育教員養成の 今・これから／令和７年度 国立大学教育実践研究関連センター協議会 報告 …… 7
◆附属坂出小学校 合同研究集会報告 …… 8
◆附属学校園 この１年 ～2025～ …… 9～12
◆教育実践総合研究（第54・55号）原稿募集 …… 12

## センター長　あいさつ

日頃より本センターの事業にご支援・ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

本センターでは、2022年４月より、①実地教育推進、②教職支援推進、③教員研修推進、④教育開発・ICT推進、⑤特別支援教育推進の５部門体制で事業を展開しております。これらの部門は、名称からも明らかなとおり、教育学部における各専門領域の教学を除き、学部全体に関わる事業および課題に対応するものです。

教員養成学部においては、教員養成の質保証と学生支援の充実が主要課題と位置づけられています。本学部においても、特に教職課程の履修指導の体系化および実地教育の充実において、本センターは重要な役割を担ってきました。①および②の部門は、それぞれ実地教育委員会および学生支援専門委員会との連携のもと、教育実習に向けた事前・事後指導の充実や、学生一人ひとりの課題に応じたきめ細かな支援に大きく寄与しています。今後も、附属学校を中心とした学校現場との連携を深め、実践的な学びの機会の拡充を通して、学生の教職志向の醸成に取り組んでいく必要があります。

一方で、教職を志望する学生数の減少や、多様化・高度化する教育課題への対応など、本センターが取り組むべき課題も拡大しています。とりわけ、④部門が所掌するICT活用指導力の育成は喫緊の課題の一つであり、今後さらなる強化が求められます。

教育課題は多岐にわたり、いずれも重要性の高いものです。５部門体制のもとで事業を推進するにあたり、本センターの関与の度合いは一様ではないものの、関係教員および事務職員との連携が不可欠です。今後とも附属教職支援開発センターの活動に対し、引き続きご支援・ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



附属教職支援開発センター長
永尾　智

## 令和８年度 附属教職支援開発センター 事業計画

**１　実地教育推進部門（実地教育に関する管理及び運営）**
（1）「大学入門ゼミ」「教職概論」（１年次）
（2）「教育実践プレ演習」（２年次）
（3）「教育実践演習」（事前事後指導）（３年次）
（4）「保育・教職実践演習」（４年次）

**２　教職支援推進部門（教職支援に関する管理及び運営）**
（1）教職志望学生への日常的支援活動
・説明会、自主サークルへの支援、願書作成、卒業前対策講座等教採対応
（2）教職志望学生及び現職教員への教育相談活動
・進路に関する相談、教職に関わる悩み等相談活動
（3）教育実践集中講座の開催

**３　教員研修推進部門（現職教員研修に関する管理及び運営）**
（1）現職教員への研修支援活動
・香川県教育センターとの連携研修
・NITS支援事業：３つのラボ（ICTラボ・保健室ラボ・授業づくりラボ）への協力
・香川県教育委員会免許法認定講習（特別支援学校教諭）
・香川県教育委員会免許法認定講習

**４　教育開発／ICT推進部門（教育開発に関する管理及び運営）**
（1）教材・資料の収集・管理・活用支援
・研究資料の収集・管理、教材・機器等の共同利用のための整備、ソフト等の閲覧貸出
（2）ICT機器の活用支援
（3）研究活動の報告等
・「香川大学教育実践総合研究」の編集、教育実践集中講座資料集等
（4）関係機関との連携
・関係機関との連携による共同研究、附属学校園等との共同研究等

**５　特別支援教育推進部門（特別支援教育に関する管理及び運営）**
・特別支援教室の管理・運営業務の遂行
・教育学研究科ならびに教育学部における特別支援教育に関する教育活動の推進
・香川県教育委員会、高松市教育委員会、附属学校園、関係諸機関との連携

**６　その他**
（1）広報活動
・ホームページ、センターニュース、パンフレット等
（2）学部・大学院関連授業科目及び卒論・修論指導

## 令和７年度　センター日誌

＜前期＞

４月８日（火）　第１回教育実践プレ演習担当者会議
４月10日（木）　教育実践演習第１回全体指導
４月15日（火）　第１回専任会議
４月16日（水）　特別支援教育実践演習第１回全体指導
４月17日（木）　教育実践演習第２回全体指導
４月23日（水）　特別支援教育実践演習第２回全体指導
４月24日（木）　教育実践演習第３回全体指導
５月８日（木）　教育実践演習特別指導
５月15日（木）　教育実践演習第４回全体指導
５月17日（土）　教育実践集中講座（第一期１回目）
５月21日（水）　教育実践集中講座（第一期２回目）
教育実践プレ演習第１回全体授業
５月22日（木）　教育実践集中講座（第一期３回目）
教育実践演習第５回全体指導
５月26日（月）　教育実践集中講座（第一期４回目）
５月27日（火）　第２回専任会議
６月７日（土）　教育実践集中講座（第一期５回目）
６月９日（月）　第1回編集会議（香川大学教育実践総合研究第51号）
教育実践集中講座（第一期６回目）
６月17日（火）　第３回専任会議
６月23日（月）　第2回編集会議（香川大学教育実践総合研究第51号）
教育実践集中講座（第一期７回目）
７月７日（月）　第１回センター運営委員会
７月15日（火）　第４回専任会議
７月24日（木）　教育実践演習第６回全体指導
９月３日（水）　第１回保育・教職実践演習担当者会議
９月９日（火）　第５回専任会議

＜後期＞

10月21日（火）　第６回専任会議
10月29日（水）　教育実践プレ演習第２回全体授業
10月30日（木）　教育実践集中講座（第二期１回目）
10月31日（金）　教育実践集中講座（第二期２回目）
11月５日（水）　教育実践演習第７回全体指導
11月６日（木）　教育実践集中講座（第二期３回目）
教育実践集中講座（第二期４回目）
11月10日（月）　教育実践集中講座（第二期５回目）
11月12日（水）　教育実践演習第８回全体指導
教育実践集中講座（第二期６回目）
11月14日（金）　教育実践集中講座（第二期７回目）
11月18日（火）　第７回専任会議
11月21日（金）　第２回保育・教職実践演習担当者会議
教育実践集中講座（第二期８回目）
11月27日（木）　特別支援教育実践演習第４回全体指導
12月１日（月）　教育実践集中講座（第二期９回目）
12月４日（木）　教育実践集中講座（第二期10回目）
12月５日（金）　第３回編集会議（香川大学教育実践総合研究第52号）
12月８日（月）　教育実践集中講座（第二期11回目）
12月10日（水）　教育実践集中講座（第二期12回目）
12月11日（木）　教育実践集中講座（第二期13回目）
12月16日（火）　第８回専任会議
12月19日（金）　第４回編集会議（香川大学教育実践総合研究第52号）
１月20日（火）　第９回専任会議
１月26日（月）　教育実践集中講座（第二期14回目）
教育実践集中講座（第二期15回目）
２月２日（月）　教育実践集中講座（第二期16回目）
２月５日（木）　特別支援教育推進部門会議（メール審議）
２月12日（木）　第２回教育実践プレ演習担当者会議
２月13日（金）　第３回保育・教職実践演習担当者会議
２月17日（火）　第10回専任会議
２月17日（火）～24日（火）　実地教育推進部門会議（メール審議）・教員研修推進部門会議（メール審議）
２月19日（木）　教職支援推進部門会議
２月19日（木）～25日（水）　教育開発／ICT推進部門会議（メール審議）
３月２日（月）　令和７年度学部・附属学校園教員合同研究集会
３月３日（火）　第２回センター運営委員会
３月10日（火）　第11回専任会議
３月17日（火）　第107回国立大学教育実践研究関連センター協議会（オンライン）

その他、実地教育科目（１年次「教職概論」／２年次「教育実践プレ演習」／３年次「教育実践演習（教育実習事前事後指導）」／４年次「保育・教職実践演習」等）のコーディネート・指導を行いました。



特集

# 学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動

## 令和７年度 学部・附属学校園教員合同研究集会を終えて



副学部長（連携担当）高木 由美子

2025年度の研究集会を令和８年３月２日（月）15：00より実施しました。今年度も総務係の藤澤さんをはじめ関係の皆様のご協力のもと無事開催することができましたこと、心より感謝申し上げます。

平篤志教育学部長のご挨拶、永尾智附属教職支援開発センター長の司会のもと、教職についての学生の実態を、基幹科目である教育実習を通じて、学部・附属の皆で考える機会として、「学生が教職に就きたくなる実習とは」というテーマで会はスタートしました。実地教育委員長の上野耕平教授からは学生の教員志望と実地教育について、交流教員の大和田俊准教授からは、附属学校での経験を活かした学生指導についてご紹介いただきました。理論と実践の往還、自己省察、そして主体的な教師像の確立を促すのに重要な「学びの履歴」や、「教員履修カルテ」の構造について松下幸司教授から情報提供いただきました。附属学校園からは実習中の様子を通して学生の教職に対する思いについて触れた事例をご紹介いただきました。

香川大学教育学部の教員就職率は、コロナ前は全国平均を上回っており、コロナ下でもほぼ平均値と同程度で推移、ところが、2025年は全国平均を10%下回りました。この問題に対して、入学時の教員志望の推移、附属坂出中学校調査自由記述の内容でフォーカスしていただいた「教材研究や学校業務（やりがいと不安を両方）」、附属学校での感動経験を学生に直に伝える経験の共有、大学教員が学びの履歴を通して学生に関わる手段の提示を順にご講演いただいたことにより、数値だけではわからない問題は明確化され、附属教員と教育学部の真の意味での連携の重要性を再確認することができました。

当日はあいにくの小雨の降る天候でしたが、全体大会の出席者は、学部58名、附属108名計166名の参加で、Zoom開催の2024年度（143名）よりも多くの皆様にご参集いただきました。働き方改革の一環で、開催時間を昨年度より10分早めて計画し、多目的ホールの学部・附属学校園共同研究のポスター成果発表は議論が白熱しました。懇親会も、空海（そらうみ）の収容定数を超え、生協のご厚意で一階で開催、盛会に終わりました。最後にもう一度、皆様方のご協力に深く感謝申し上げます。

「香川大学の教職課程の概要と今回のFD」というタイトルで、教職課程概要と広く教員養成への展望、全学の教職課程に関する課題や、FDで何が必要とされているのかについて概説いただきました。続いて、附属坂出中学校長鈴木正行校長による講師紹介ののち、中高生による瀬戸内海の海洋ごみ問題の解決への挑戦～ICTと市民協働による実践が変える解決の未来～というタイトルで山陽学園中学校高等学校、井上貴司教諭による現場の教員の視点を活かした講演を拝聴しました。

井上先生には、山陽学園高等学校地歴部の生徒が、部活動を通して、地域の問題解決を進める取り組み例をご紹介いただきました。先生は、生徒たちには、自ら考え行動に移し、社会と繋がりを持ち、立場を変えて視点を変えることで、多様な経験から校内で学んだことを活用し、社会を動かせる課題解決につながる気付きと学びを深めてもらえるよう仕掛け作りや後方支援に取り組んでおられること、そして、生徒が自ら興味・関心を高め、リーダーシップを自由に発揮できることで、自己肯定感や責任感、やりがい、自己の成長・可能性の向上を実感してほしい、という抱負を述べられました。

集会は、200人近い参加者となり盛会のうちに終わりました。附属学校園と、香川大学教育学部は、様々な機会を活用し、より一層強固な連携教育を進めていきたいと思います。








## 研究グループ報告

※大学教員は、研究代表者のみ記載。以下同じ。

### インクルーシブなクラスづくりと保育の変容過程

松井 剛太※、附属幼稚園

本研究では、障害の人権モデルを参照に、インクルーシブなクラスづくりに関する検討を行った。人権モデルは、社会モデルによって発見された障壁をどのように除去したら、障害者の尊厳が保たれるのか、その方針や方向性を検討するものである。幼稚園での事例をボルノーの教育的雰囲気を手がかりに検討した結果、集団の雰囲気として、開放的な雰囲気、認める雰囲気、真剣な雰囲気、わいわいしている雰囲気の４つを見出した。ボルノーの教育人間学的な視点は、人権モデルに基づく子どもたちの自尊心と自己価値の感覚を尊重する雰囲気づくりに繋がることが明らかになり、クラスがインクルーシブになっていくプロセスと関連していることが示唆された。



## 学校教育活動へのスポーツダーツ導入の可能性に関する研究

宮本 賢作※、附属高松小

ダーツは飲酒を伴う夜の社交場において普及しているスポーツであり、学校教育の場への導入には多少抵抗を感じる面がある。その一方で、集中力や調整力の向上などダーツが持つ特性が神経機能の発達に良い影響を与える可能性も報告されている。令和５年度に実施した異年齢活動「ちょうせん」でダーツ体験を実施した児童の感想では多くの児童が「体育の授業でもやってみたい」「保護者と一緒にやってみたい」等、ダーツを肯定的に捉えていた。本研究では児童の感想とダーツ指導者等との座談会から体育をはじめとした学校教育活動へのダーツ導入の可能性について検討した。体育授業では「ゲーム・ボール運動」を中心として各種の運動領域での実施が可能であることが確認された。また、ダーツはゲームの中で四則演算の計算を瞬時に行う場面があり、算数科での教科横断的な学習効果や附属高松小学校での新領域「経験」など、さまざまな活動で可能性が示唆された。



## リズムダンスの授業が学級集団にもたらす効果の検証

大西 美輪※、附属高松小、附属坂出小

リズムダンスは、リズムや動きを通して友達と関わり合い、互いの動きのよさや面白さを味わえることが特徴です。他の運動領域に比べて技能差が生まれにくく、友達の動きをまねしながら楽しめる点も魅力です。本研究では、小学校でリズムダンスの授業を実践し、その後の学級の雰囲気や人間関係にどのような変化がみられるのかを検証しました。

授業後のアンケートでは、挑戦してみようとする気持ちの高まりや、学級内の人間関係の改善、多様な友人関係の広がりなど、「関係の質」に変化が生まれた可能性が示されました。こうした変化は、多くの友達とペアで踊る中で友達の新たな一面に気付き、見方が変わったことが一因といえます。また、自分の動きが友達にまねされる経験から「認めてもらえた」という安心感が育まれ、それが次の活動への意欲につながったこともうかがえます。

今後は、こうした学級の前向きな変化をより確かなものにするための指導方法について検討していきたいと考えています。



## AIチャットを活用した教材作成

黒田 勉※、附属坂出中、附属高松中

今回、AIチャット利用の授業の発展形としてスマート農業モデルにAIの利用に関する授業の実践事例を紹介し、AIの授業への応用を提案した。

この授業の題材は、以下のような目標を持って行っている。作物の成長に影響する３つの環境要因のうち、気象的要因（光・温度・水）に着目し、それらを自動的に計測・制御する植物工場モデルの開発に取り組む。システムの具体としては、micro：bitを利用し、温度・照度センサ、土壌水分センサで計測したデータをもとにLEDや給水ポンプ等のフィードバック制御を行い、育成環境を自動調整する。また、「技術による問題の解決」の難易度としては、技術を応用するレベルを想定しており、既習の技術の見方・考え方を統合的に働かせながら技術の最適化を図ることをねらう。加えて、「デジタル技術の民主化」により、情報の技術を使いこなす能力を身に付ければ、誰もが思いや願い、意志を具現化するチャンスを広げることができる可能性を体感させることで、技術による問題の解決に市民として参画する態度も育成できると考える。このように、植物工場モデルの製作を通して、生物育成の技術に関する問題を情報の技術で解決する経験は、複数の技術を組み合わせることで新しい価値を生み出すというイノベーションの考え方につながるものであり、生徒自身が生活や社会の問題解決に技術を生かせる可能性を実感することにつながる。香川県における生物育成の技術に関わる問題を見いだして課題を設定し、情報の技術を活用する解決策を構想し、実践することで主題を実現できると考え、本題材を設定した。

今回は、実際に使用してアプリケーションや、ハードウエアの展示を行い、AIを使用した育成状況の確認方法を見学者に対して例示を行い、AIの活用に理解を深めてもらうことができたと考えている。

## 生成AIを活用した教育コンテンツの開発

大久保 智生※、附属高松中

予測困難な社会における主体的な進路選択を支援するため、生成AIを用いた独自の「性格・職業診断アプリ」を開発し、生成AIに関するリスク教育と生成AIを活用したキャリア教育の効果を検証しました。附属高松中学校２年生92名を対象に、アプリ利用群と非利用群を設けて、実践を行いました。結果として、アプリの有無に関わらず両群でキャリアに関する自己効力感が向上し、生成AIに関するリスク教育により生成AIへの信頼が低下しました。アプリ独自の教育効果はみられませんでしたが、従来の教員による手厚い指導と同等の教育効果が得られることが実証されました。AIによる分析プロセスの自動化は教員の指導負担を軽減するため、持続可能なキャリア教育モデルとして有用であるといえます。



## 誰一人取り残さない教育の実現に向けて

坂井 聡※、附属特別支援学校

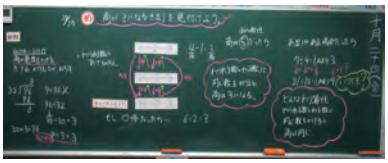
本校では、インクルーシブ教育の実現に向け、児童生徒一人一人が安心して学び、自分らしく力を発揮できる環境づくりに取り組んでいます。ICTを活用した支援として「アシストガイド」を導入し、活動の見通しや手順を視覚的に示すことで、不安の軽減や主体的な行動の促進を図っています。結果、自ら手順を確認しながら活動に取り組む姿や落ち着いて学習に向かう様子が見られました。また、障害理解の促進に向けて、交流及び共同学習の事前授業で「障害の社会モデル」について学ぶ機会を設けています。交流では、ペアでの関わりや協働的な活動を通して、互いの違いを受け止めながら関係を築く姿が見られ、相手の立場に立って考える意識の高まりがうかがえます。さらに、教員の専門性向上を図るため、行動分析の視点を取り入れた研修や事例検討を重ね、児童生徒の行動を環境との関係から捉え直す実践を進めています。今後もこれらの取組を地域へ発信し、誰もが共に学び合える教育の実現をめざしていきます。



## 多様な他者と共に、自ら学びを進める子供の育成

松島 充※、附属坂出小

本研究は、多様な他者と共に自ら学びを進める子供の様相を提示することを目的とした。その方法として発達的ケア、認知的ケア、認識論的ケア、共同体的ケアに着目した。算数では認識論的ケアの視点から、学級全体のすべての子供が学習対象である算数を分かろうとしている過程をシームレスにつなげる実践の様相を示した。道徳では共同体的ケアの視点から、教師自身の弱さの自己開示という手立てをもとに、自分の弱さも含めて学級では何でも言ってよいという文化を醸成している様相を示した。これらの実践のように、すべての子供がシームレスに学習対象を認識する過程を重視したり、何を言っても受容される学級の文化が醸成されたりしている実践が積み重なることによって、すべての子供が多様な他者と共に、自ら学びを進めることが可能になるであろう。





## 責任ある暮らしの実現を目指す小学校家庭科の題材開発

一色 玲子※、附属高松小

本研究では、責任ある暮らしの実現を目指し、食品ロスを切り口に、小学校家庭科の「食生活」と「消費・環境」を関連付けた題材開発を検討しました。外部講師による講義や先行研究からは、家庭系食品ロスの削減には、知識や関心の喚起に加え、生活の中に行動を促す仕組みを取り入れ、具体的な行動変容を支える視点が重要であることが示唆されました。また、附属高松小学校児童の食品ロス削減行動に関する調査・実践からは、てまえどり、買い物前の食材確認、食材の使い切り、残食のリメイクなど、調達・調理・処分の各場面において具体的な工夫を捉えたり実践したりしている実態が明らかになりました。一方で、喫食場面での食品ロスには関心が向きにくい傾向も確認されました。今後は、学校給食という児童に共通する食事場面を軸に、残食問題の解決を視野に入れ、家庭・学校・給食を往還する生活に即した家庭科題材の開発と実践に継続的に取り組んでいく予定です。





## 保護者の表現理解につながる「子どもの世界展」に関する試み

吉川 暢子※、附属幼稚園

本研究では附属幼稚園で実施した「子どもの世界展」（令和５－７年度）の成果として、子どもの学びや保護者の造形意識が変化したのかについて保護者へのインタビュー等を実施し、造形意識の変容などを明らかにすることが目的であった。保護者のインタビューから「子どもの世界展」の参加を通して、子どもの成長を感じたことや、子どもとの関わりをもっと持ちたいという気持ちが芽生えたといった子育てに関する気持ちの変化があり、子どもの作品をつくったりする姿を見て、その時間を見守る時間の大切さや一緒にすることの大切さに気づいたとの意見があった。

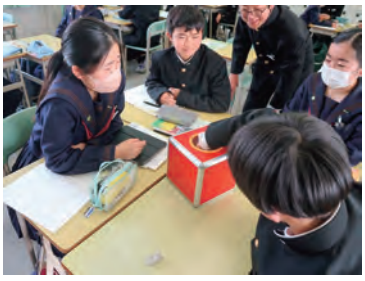
これらのことからも、従来型の作品展では得られない子どもの表現理解につながる学びを得ることが出来たといえる。そのために、イベント的に「子どもの世界展」を実施するのではなく、保育者らと連携を取りながら普段の遊びにつなげていくとより子どもの多様な表現の獲得や学びに繋がっていくことが示唆された。



## 確率教材による不平等を是正するカリキュラム開発

杉野本 勇気※、附属坂出中

本研究では、２つの授業実践を行いました。順序によって当たりやすさには違いがあるのかを検討する授業においては、箱の中のボールが色によって少し柔らかさが異なることに気が付くと、自分が意図した色のボールを出せるようになり、「同様に確からしい」という基本前提が保証できないことを実感することとなりました。また、全数調査と標本調査について考える授業においては、もともと母集団として生徒全員を想定していましたが、保護者、地域の方々、小学校、幼稚園も調査対象に入れるべきであることや、様々な責任が伴う代表生徒を抽出することの是非などについて議論が展開しました。いずれの授業においても、常識的には平等と考えられていることを見直す契機となり、隠れた不平等に目を向けることへ繋がる学習となりました。



## 保育内容領域「言葉」から捉える幼－小接続

松本 博雄※、附属坂出小、附属幼稚園、高松園舎

幼稚園児と研究協力者である大学生とで、日常の保育を通じて手紙のやりとりを展開するアクションリサーチ「ぶんつうプロジェクト」を学部専門科目『保育内容の指導法（言葉）』と連動して継続し７年目となる。学生・幼稚園教諭・小学校教諭・大学教員が協働しての成果報告会を、本年は２月10日に28名の参加を得て実施した。本年度の成果として、幼－小接続期に習得される書き言葉の、文字という単一の形式を超えるマルチモーダルな特徴と、それを社会的なやりとりに埋め込み扱う必要性が確認された。手書きによる書き言葉を使用する機会が急速に減少し、動画やAIライティングを含めた“表現”のマルチモーダル性がより一層問われる時代に、伝えあう言葉から自分のための言葉へのスムーズな学習の転移を支えるために、教育実践として何をどうする必要があるか。幼－小移行期の保育・教育実践における書き言葉を支える具体的な環境構成・活動設定のあり方と合わせ、引き続きこれらの課題の考察を進めたい。



# 令和７年度 教育実践集中講座 実践報告

尼子 智悠・松本 裕美・日下 哲也

## 魅力のある職業　先生になろう ～夢と笑顔を大切にする教師をめざして～

**第一期**（4～9月）

［第１回］５月17日（土）教育法規
**「教育法規とケース・スタディ①」**（尼子）
**「教育法規とケース・スタディ②」**（松本）
［第２回］５月21日（水）子ども理解
**「『子ども理解』と授業実践・附属学校参観の心がまえ」**（尼子）
［第３回］５月22日（木）教育実習事前指導
**「私の出会った教育実習生・教育実習に向けてのメッセージ」**（松本・日下）
［第４回］５月26日（月）道徳教育
**「道徳科の多様な授業づくり～心を耕す道徳の授業～」**（松本）
［第５回］６月７日（土）教育法規
**「教育法規とケース・スタディ③」**（尼子）
**「教育法規とケース・スタディ④」**（松本）
［第６回］６月９日（月）学級経営
**「学級で育つ子どもたちのために」**（日下）
［第７回］６月23日（月）生徒指導
**「生徒指導の実際について」**（日下）

## プロの教師とは何か？ ～教師になるあなたへのエール～

**第二期**（10～3月）

［第１回］10月30日（木）道徳教育
**ケーススタディ**
**「道徳科の多様な授業づくり～心を耕す道徳の授業～」**（松本）
［第２回］10月31日（金）教育課題の探求①
**「日本の学力問題」**（尼子）
**「これからの道徳教育」**（日下）
［第３回］11月６日（木）教育方法と実践
**「ICTを活用した授業づくり①」**（尼子・松本）
［第４回］11月６日（木）生徒指導・進路指導
**ケーススタディ**
**「いじめ問題との関連を中心に」**（尼子）
［第５回］11月10日（月）教育の最新事情①
**「教師に求められる力」**（尼子）
［第６回］11月12日（水）教育実習事後指導
**「教育実習を振り返って」**（松本・日下）
［第７回］11月14日（金）教育課題の探求③
**「学校現場における教育課題とは」**（日下）
［第８回］11月21日（金）校種別による選択実務研修
**「はばたけ若き力を生かして～４月からの心がまえ(小学校)～」**（松本）
［第９回］12月１日（月）教育の最新事情③
**「教育課程と学校評価」**（松本）
［第10回］12月４日（木）教育方法と実践
**「ICTを活用した授業づくり②」**（尼子）
［第11回］12月８日（月）学級経営
**「学級で育つ子どもたちのために」**（日下）
［第12回］12月10日（水）人権教育
**「学校教育における人権教育～小学校での取組事例に学ぶ～」**（日下）
［第13回］12月11日（木）生徒指導・進路指導
**ケーススタディ**
**「校務分掌との関連を中心に」**（松本）
［第14回］１月26日（月）場面指導（ロールプレイ）
**「多様な対応力の向上を目指して」**（日下）
［第15回］１月26日（月）教育の最新事情④
**「学級で育つこどもたちのために」**（日下）
［第16回］２月２日（月）場面指導（ロールプレイ）
**「多様な対応力の向上を目指して」**（日下）










## 教育実践集中講座を終えて －教職をめざす皆さんへ－

日下 哲也（日本教育公務員弘済会香川支部支部長／香川大学客員教授）

学校がどんどん変化しています。例えば、教室には大きな電子黒板が入り、子どもたちの机上にはノートパソコンやタブレットがあって、黙々と取り組んでいる姿があります。授業内容は「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善が図られ、誰一人取り残さず、すべての人の可能性を引き出す学習が展開されています。教職員は働き方改革のもと、学校業務のDX化に取り組み、効率化を図っています。地域や家庭とともに支え合う社会の実現に向けコミュニティスクールの推進が図られ、中学校ではクラブ活動の地域展開の期日を示し、地域を巻き込んだ大きな変化が起こりそうです。

このような変化の真っ只中に飛び込んでいく皆さんは、不安一杯ではないでしょうか。しかし、このような変化はこれまでも教育の世界で起こっています。新しい教科・領域（生活科・総合的な学習の時間）の創設。小学校への英語の導入。学習内容の改編等。その度に教職員は新しい時代を生きる子どものために研修を重ね、乗り越えてきました。学校は協働社会です。決して競争社会ではありません。誰かがトップになるのではなく、みんなで一つの目標に向かって進む社会です。分からなかったり、困ったりしたら学校の先輩に聞けばいいんです。子どもの未来を築くために、働く仲間とともに困難を乗り越えてください。教員という仕事は、子どもの笑顔にふれ、喜びに満ちた姿を間近で見て、いっしょに喜び、やりがいを感じ、ともに成長していく素晴らしい仕事です。教育現場は皆さんを待っています。

# 交流教員から見た 学校教育教員養成の 今・これから

## 学校現場に戻って思うこと



川東 芳文（前交流教員）

この４月、３年間の交流人事を終えて高校現場に復帰しました。教育学部で過ごした日々は、教職を志す学生の真摯な姿勢に触れ、私自身の教育観を問い直す貴重な機会となりました。学生一人ひとりが、「子どもたちの成長を支えたい」というまっすぐな思いを胸に、授業づくりや学級経営について多様な視点から考え、理想の教師像を模索する姿はとても頼もしく感じました。一方で、教師に求められる資質能力が多岐にわたることや学校現場の多忙さに対する不安の声も多く聞かれました。授業や教育相談では、私自身の経験や失敗談、自分の強みを生かすことやチーム学校としての連携の大切さなど、現場の実情を具体的に共有しながら、前向きな取組につなげられるよう努めてきました。

現場に戻ると、価値観の多様化やICTの普及など、教育を取り巻く環境の変化の速さを実感します。授業づくりや文書作成など、特にICTを活用する場面は今後さらに増えるでしょう。しかし大切なのは、ICTの使用を目的化したり、生成AIが出力した提案をそのまま利用したりするのではなく、学校教育目標や子どもたちの実態に照らして判断し、最適な方法で活用する教師の力です。授業や指導の場面において、最適解は子どもや状況によって変わります。だからこそ大学は、個別の知識やスキルの獲得にとどまらず、困難に直面したときに支えとなる教育観の軸を育む場であってほしいと感じています。

そして私自身も、学校現場で若い先生方が自分らしさを生かしつつ、子どもたちの前に自信をもって立てるよう、チームとして教職員が互いに支え合う環境づくりに力を注いでいきたいと思います。

## 学び続ける教師の育成を目指して



川原 一浩（交流教員）

この４月に高等学校より交流人事教員として着任し、教員養成を担う本学の一員として、教職を志す実践的指導力を備えた学生の育成に携わっています。

模擬授業や教育実習の事前・事後指導の場面では、単に「うまく授業ができたかどうか」を問うのではなく、「なぜその指導方法を選択したのか」「子どもたちにどのように成長してほしいのか」といった観点を大切にしています。

子どもたちの姿をふまえて「自分ならどう関わるか」を考え、実際に授業というかたちで試してみた結果を教員や仲間と対話的に振り返る中で、学生は自分の指導の良さと課題に気づき、次の一歩を構想していきます。

学生一人ひとりとの丁寧な対話を通して、試行錯誤を恐れず挑戦し、その過程を振り返りながら、自らの教育観や指導観、子ども観を言語化することが、将来の教員としての基盤づくりにつながると考えており、このような往還的な学びの積み重ねを通して、変化の大きいこれからの学校現場においても、教員自ら学び続けることで、子どもたちとともに成長する教員が育つと信じて止みません。

交流人事教員として大学にいるからこそ、学校現場での具体的なエピソードを交えながら、そうした試行錯誤のプロセスに寄り添い、学生の挑戦を後押しする役割を果たすとともに、大学と学校現場が互いの強みを持ち寄り、「学び続ける教師」の育成を通して、教員を目指す学生の実践的指導力の向上と地域の教育力の向上に寄与したいと思います。

# 令和７年度　国立大学教育実践研究関連センター協議会 報告

2025年度のセンター協議会は、2026年３月17日（火）にオンライン（Zoom）にて開催されました。例年は２回の開催ですが、諸事情により本年度は１回になりました。

当日は、会長の森下孟氏のご挨拶後、予算・決算、役員体制、活動報告、会費納入、退会大学について、審議・報告がなされました。活動報告では、信州大学よりプロジェクト研究（「教員就職への意欲に及ぼす諸要因の検討」）の進捗状況について報告がありました。詳細について文書で示して欲しいという意見が出されました。開始されたばかりの研究であり、センター協議会の独自性が顕れるような今後の展開が期待されています。

各センターからの現状報告・交流後に、前回に引き続きこれからのセンター協議会のあり方について議論がなされました。各大学でのセンターの位置づけ・役割はそれぞれです。かつての教育実践総合センター時代とは大きく変わりました。今後、協議会参加大学の希望者を募り、原案的なものを作成し、2026年度の協議会でつめていくことになります。次回の協議会は９月を予定しています。

香川大学教育学部の本センターへの期待は多岐に渡りますが、何より学部の実地教育を土台に据えていることが大きな特徴であり、強みです。今後もそこを大切にしながら、センター運営に取り組んでいきたいと考えています。

（文責：山岸 知幸）

# 附属坂出小学校　合同研究集会報告

６月８日（月）午後、附属坂出小学校において、大学教員との合同研究集会が開催されました。この合同研究集会は、附属坂出小学校が主催し、毎年５～６月ごろに開催している取り組みです。

５時間目、第３学年　国語科「経験したことや想像したことを詩で表そう　～『心が動いたことを詩で表そう』～」の授業公開がありました。本時の学習課題（めあて）「つたえたいことがよくつたわる言葉をえらぼう」に基づき、児童はまず、自分が詩で伝えたいことについて、その時の体験や思いを同心円のイメージマップ上に書き出していきます。次に、友だちとイメージマップを見せ合いながら、インタビューを交わしました。「その時どんな匂いがした？」「手触りはふわふわだった？」「そーっと抱っこしたんじゃない？」など、五感の視点からお互いに聞き取り、自分が書き出していなかった言葉をイメージマップに書き加えていきました。ペアを変えながら行う相互インタビューを通し、自分の思い出を振り返り、悩みつつも楽しそうに語り合いながら言葉を紡ぎ出す児童の姿が印象的な１時間でした。

授業公開の後、研究集会が開催されました。教育学部教員・香川県教育委員会の指導主事の先生方など、学校内外の教育関係者29名の参加のほか、今年度は近隣の公立小学校から教員研修として17名の先生方の参加もあり、地域教員の指導力向上の中核を担う附属学校の役割も感じる研究集会となりました。

まず、附属坂出小学校の本年度の研究主題「共に学びを進め合う子供の育成　～共調整を促し、自己調整する方法の習得を目指す授業づくり～」について、研究部の先生より研究説明がありました。その後、公開授業について書き出された２色のコメント付箋紙を整理しながら、授業討議が行われました。先述したように本年度は多くの現職の先生方の参加を得たこともあり、参加された先生方それぞれが見取った児童の学びの姿を挙げながら、多様な意見が交わされ、合同研究集会ならではの多視点による討議の機会となりました。

附属坂出小学校の授業後討議においては、公開授業における児童の具体的な学習状況・発言に基づき、授業全体の流れと照らし合わせながら、個への支援について検討が加えられます。その陰には、公開授業において複数の抽出児童の１時間の学習状況をつぶさに観察し、細やかに記述記録する附坂小教員の姿があります。授業終了直後には、担当する抽出児童に対し、共通質問項目による聞き取りも行われています。そしてこれら抽出児童の学習状況の記録は、授業終了から討議開始までの僅かな時間で集約され、参加者の手元に配られます。

――このような情報収集・集約ならびに討議のための準備が滞りなく進められる様子から、附属坂出小学校における校内研修の日常化と積み重ねにより、児童を見取る視点の共有化・意識化が図られ、研究主題を意識した実践の見取りが学校全体として深められていることを強く感じました。　（文責：松下　幸司）



# 附属学校園 この1年 ～2025～

香川大学教育学部の各附属学校園より、2025年度の実践研究の取り組みについて ご報告いただきます。

## 附属幼稚園

### 附属幼稚園　研究経過報告

研究主題　**子どもの育ちと学びを支える**
**～心が動く 状況づくりを探る～**

#### 1　研究主題について

保育者は単に物的な環境条件を整えることだけではなく、子どもが“～したい”という思いを膨らませ、自ら育ちや学びを獲得していく過程や、その背景にある人的・自然的・社会的などのさまざまな環境条件との関係性にも注意深く配慮して支援していくことが大切であり、それらを本園では「状況づくり」としています。子どもの思いを中心に置きつつ、保育者としての役割について今一度問い直しながら、子ども一人ひとりの思いや願いが実現できる状況づくりに努めていくことが重要であると考えています。




#### 2　研究内容と成果

研究を進めていく過程で、「子どもの心が動き、わくわくしながら遊びこむ中に、多くの育ちや学びがある」「まずは大人も子どももわくわくするような状況をつくることが不可欠である」という共通認識に至りました。子どもの育ちと学びを支えるため、これまでの研究の成果も共有しながら、心が動く状況づくりについて探っていきました。

**（1）明日の保育につなぐ「保育記録（振り返り）」や事例研究、終礼での情報共有を通して**

日々の保育記録は、明日の保育を考える上で重要です。少し時間をおいて事例に書き起こしてみることで、その時は見えてこなかった子どもの育ちを捉え直すこともできています。また、終礼で日々の保育における戸惑いや子どもへの接し方の工夫等について話し合う中で、多面的な気付きを得ることができました。

**（2）園内外の先生方との保育研究 を通して**

**【保育について語ろうデー】**
参加者と一緒に事例検討をしたりテーマを設けて語り合ったり、実践についての情報交換を行ったりすることを通して、保育の質を高める園内研修の在り方や同僚性のモデルを提案しています。令和7年度も、多くの保育者や小学校教員、大学教員と一緒に、本園の研究主題にもつながる多面的な話し合いをすることができました。



**【幼小合同研究】**
「ちょこっと参観・ちょこっと交流」を合言葉に、互いの教育を参観する中での気付きを語り合う場を多くもつことを通して、資質・能力の捉え方・見え方から互いの教育について理解を深めることができました。

#### 3　今後の研究課題

周りの大人同士がつながること、子どもの学びがつながることを大切にしながら、「心が動く状況づくり」に焦点を当てた園内外の先生方との語り合いの場を増やし、研究主題に迫っていくとともに、「学びをつなぐ」という視点での事例研究の内容を幼小の教員で共有するなどしながら、幼児期、幼小接続期における心が動く状況づくりについて探っていきたいと考えています。

## 附属幼稚園 高松園舎

### 高松園舎　研究経過報告

研究主題　**『環境の在り方について考える』**
**～子どもとともにつくる遊びと学び～**

#### 1　研究主題について

令和７年４月１日、高松園舎は創立50年を迎えました。子どもたちは豊かな自然環境の中で生活しており、恵まれた環境を生かして創ってきた遊びや文化があります。

令和４年度より『環境の在り方について考える』を主題とし、高松園舎の豊かな環境について再考し、教師自身の子ども観や保育観を問い直してきました。令和７年度はサブテーマを「子どもとともにつくる　遊びと学び」とし、【遊びの中で育まれる学び】に着目し、幼稚園における環境の在り方について研究しました。



#### 2　研究内容と成果

高松園舎としては、【学び】は知識習得だけではなく、子どもが感じ取ったり経験したりすることと捉えるとともに、遊び込むことでより学びが育まれると考え、学びが生まれる要因について事例検討を中心に研究を進め、以下のようなことが明らかになりました。

(1)　遊びや生活の中での子どもの声を教師が聴き、どのような経験をしているかを見取ることが大事。
(2)　子どもが自己選択・自己決定できるとともに、遊びを継続できる工夫・ゆるやかな時程等、意図的な環境構成や支援が必要。
(3)　子どもの遊びを肯定し、問いを投げ掛ける教師の姿勢が重要。



また、附属高松小学校との幼小連携については、５歳児と２年生との交流活動について研究を進めました。交流内容は、教師が子どもの思いを汲み取り、サツマイモの栽培や楽器作りなど日常の遊びや生活を基にした内容を計画しました。そうすることで、子どもが興味をもって環境や人にかかわり、共に考えたり活動したりしようとする姿勢につながりました。

#### 3　研究内容と成果

“育てたい幼児像”に還る指導計画の見直しを行っていきます。

## 附属高松小学校

本校の研究について

**① 研究主題について**

本校はテーマを「分かち合い、共に未来を切り拓く子どもの育成」とし、研究を進めてまいりました。これからの先行きが不透明な社会では、価値観や年齢の違い、初めて会った人とも分かち合いながら、未知の問題を解決するために新しい知や価値を生み出すことが必要となると考えます。私たちは、どんな時代、場所、集団においても、夢や憧れをもち自律的に学ぶ力、「ひと・もの・こと」への共感的・協同的に関わる力、問題を解決し、知や価値を創造する力等を発揮しながら、仲間と共に最適解を探っていける子どもこそが、研究テーマに掲げる人間像であると考えています。

**② 研究内容と成果について**

本校は、令和４年度より４年間、文部科学省研究開発学校の指定を受けました。研究課題は、「個の生活知を豊かにする新領域『経験』と、体験を価値の創造につなぐ『じぶん』の時間を創設し、経験から新たな知や価値をつくる教育課程に関する研究開発」です。

新領域「経験」は、２つの小領域で構成し、異学年集団で活動を行います。

第１小領域の「はっけん」の時間は、教科学習との関係で「あっ」という驚きや気付きが生まれる時間です。この時間では、異学年集団で多様な「ひと・もの・こと」との出合いを通して、学問につながる事象や課題に対する自己の考えの筋道や組み立て（自分なりの論理）をつくることを目指します。「はっけん」の時間でつくった自分なりの論理は、教科学習での知識と有機的につながり、知を再構成していくことに効果的に働きます。



【「はっけん」の時間】

第２小領域の「ちょうせん」の時間は、社会とつながったプロジェクト活動を通して、うまくいかない経験や成功した経験を味わいながら、生き方・在り方につながる思いや願いをもったり、感じ方に気付いたりできるようにします。

また、「じぶん」の時間は、体験をもとに、同学年集団で議論を深め、価値の創造を目指す時間です。価値の尺度が劇的に変化するといわれる不透明な時代の中、他者との協働により、既存の知識や価値から新しい価値を生み出していくといったプロセスは、これからの社会に合った新たな価値創造のかたちになり得ると考えています。



【「ちょうせん」の時間】

さらに、教科学習では、経験領域で豊かにした経験を生かして、実感を伴った学習内容の理解を図ることで、学習後に身の回りの捉え方がこれまで以上に豊かになると考えています。

これらの成果を、初等教育研究発表会（令和８年２月５日、６日）で公開をいたしました。多くの参会者を得て、地域教育の拠点校として、研究開発学校として全国に発信ができたと考えています。

**③ 今後の研究について**

新しいカリキュラムのもとで、子どもたちが生き生きと学習に取り組む姿が発信できるよう、成果と課題を整理し、活動の精選と持続性を踏まえ、よりよいものになるよう、今後も研鑽を深めていきたいと思います。

## 附属坂出小学校

本校の研究について

### 研究主題　共に学びを進め合う子供の育成（１年次）
### ～自己調整する方法の習得を目指す授業づくり～

**１　研究主題**

現代の予測困難な社会において、生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働して課題を解決する力の育成は喫緊の課題です。そのため、本研究では、目指す子供の姿を「全員の課題解決を目指して、見方・考え方を働かせながら、学びを進めることを他者と共に繰り返している姿」と定義し研究を進めました。




**２　研究内容と成果**

以下の三つの手立てによって、自己調整する方法の習得を目指す、授業づくりを行ってきました。



**（１）方法の習得の段階に合わせて手立てを変えること**

子供の習得の段階を把握し、「認知」段階では方法やその手順の教示を行い、「想起」段階では方法を使えている友達への注目を促すなどして、方法の習得の段階に合わせた手立てを行いました。

**（２）方法を使いやすくすること**

他者と関わる必要感を生む活動を設定したり、他者と関わりやすい環境を整えたりするなどの手立てを行うことで、他者との関わりを通して、より方法を使いやすくなるように工夫しました。

**（３）方法のよさを感じられるようにすること**

教師が「複数の結果を比べた（方法の使用）から、共通点が見付かった（成果）のだね」というように、方法の使用と成果を結び付けて価値付けることで、方法を主体的に使っていこうとする意欲を高められるようにしました。

**３　今後の研究課題**

他者と関わる必要感をもてるようにしたり、他者と関わりやすい環境を整えたりするなどの手立てにより、他者と関わるよさを自覚した子供たちが多くいました。一方で、「自ら学習を進めていけると思う」ということに対して不安を持っている子供がいることも明らかになりました。次年度も、自己調整する方法の具体についてより発達段階や教科に応じたものを探るとともに、方法の確実な習得につながる手立てについて研究を進めていきます。

## 附属高松中学校

本校の研究について

研究主題　**自らを高め続け、新たな時代に向けて責任をもち行動する人間の育成**
**―知性と省察性を育むカリキュラムを通して―**

令和５年度より文部科学省から研究開発学校指定を受け、知性と省察性を育む新領域「MIRAI」を設置したカリキュラムの開発、実践を行っています。

### ○　教科学習

今年度は、「知の構造」を用いて「見方・考え方（永続的理解）」を明確にすることで、学習内容を整理するとともに、教科で育んだ知性がMIRAIで発揮できるようにしました。

### ○　MIRAI 協働の学び

今年度は、困難、矛盾、葛藤等に出合うプロジェクトと、体験と振り返りが往還できる省察の時間の在り方を再考しました。その結果、プロジェクトの成功に向けて試行錯誤したり、それらを通して自己の生き方・在り方について問い直したりする様子が見られました。

### ○　MIRAI 個の学び

今年度は、自分の理想像や興味関心を掘り下げる時間を設定するとともに、自己の学びが俯瞰できるログ、多面的な視点を獲得するゼミについて再考し、実践しました。その結果、様々な人と関わる中でよりよい探究活動の在り方を問い続ける様子や、自己を見つめ直す様子が見られました。

教科学習



【技術・家庭科】
○本質的な問い
　どうすれば使用者のニーズを満たす安全で使いやすい双方向性のあるコンテンツとなるのか。

MIRAI 協働の学び



【３年生】
　栗林公園で開催したイベントにて、来場した外国の方に折り紙を教えながら交流している様子。

MIRAI 個の学び



【課題設定のゼミ】
　課題設定の理由について、グループの仲間（異学年）や大学生に伝え、課題を吟味している様子。

## 附属坂出中学校

本校の研究について

研究主題　**自己を探究し続ける生徒の育成**
**―聴き合うことで深まる自己の「ものがたり」―**

### １　研究主題について

本校の学びは語ることを通して自己理解や自己形成につながる自己の探究に主眼を置いており、自己を理解する枠組みとしての「ものがたり」を軸に研究を進めている。今期は特に聴く行為に着目し、自己の「ものがたり」が他者との共同行為によって深まっていく学校文化を、カリキュラム全体を通して具現化する。

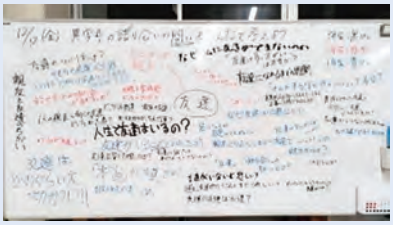
### ２　今期の研究内容

研究の目的
「聴くこと」「聴き合うこと」を通した他者理解の視点から、教科学習、CAN・シャトル、「語り合いの時間」のあり方を見直し、「ものがたり」としての自己の探究を具現化するためのカリキュラムと学習環境のあり方を提案する。

対話を豊かにするためには、聴き手を育てることが重要である。聴く行為とは、情報を受け取るのではなく、他者の語りの奥にある背景まで理解しようとする姿勢である。つまり、「人が人を知ること」を通して、「自分の人生や世界を広げていくこと」である。それが深い学びとなり、「自己の探究」につながると考える。

### ３　成果と課題

・CANでは、課題設定前に自己に向き合う時間をとることで、自分の興味を深堀りする探究や、社会の困りを解決するような探究などが生まれ、シャトルは探究の見通しをもたせ、スキルを育成することに寄与した。
・「語り合いの時間」では、配布資料やホワイトボードを使った問いづくりにより、資料の背後にあるテーマについて生徒は各自の思いを語り、聴き合うことができており、そのような聴き方は授業の中でも見られた。
・短期目標を設けて実践することで、聴き合う姿勢が見られるようになった。他者の言葉を聴く中で、どのように問いが生まれ、自己の探究につながっていくのかについては整理が必要である。



「友達」をテーマにして募集した異学年語り合いの問い

## 附属特別支援学校

本校の研究について

### 研究主題　卒業後の豊かな生活を支える支援
### ～「自己理解」と「周囲の理解」の相互的なアプローチから、インクルーシブ教育の実現をめざして～（２年研究２年次）

**１、研究主題について**　本校では「豊かな生活」を「尊厳ある人と自ら認め、周囲の人に認められて、サポートを得ながら自己選択・自己決定できる幅を広げ、主体的に様々な活動に参加して自分らしく過ごす生活」と定義付け、その実現のために実践研究を行っています。卒業後に「豊かな生活」を送るためには、当事者自身が必要な支援を理解することに加え、社会全体が障害を社会モデルで捉えることが重要だと考えています。そこで本校では、自分のことをポジティブに理解する「自己理解を深める実践」と、周囲に特別支援学校の児童生徒や障害について知ってもらう「障害理解促進に向けた啓発」の二つの視点から研究を進めてきました。

**２、研究内容とその成果**　小学部では、五感を活用した学習を通して見付けた「自分の好き」を写真やイラストで記録する「だいすきぶっく」を作成し、自己理解の土台を築く取組を行いました。また、交流校に対して障害の「社会モデル」を伝える事前授業や継続的な交流学習を行い、将来の豊かな生活を支える理解の土壌を育んできました。中学部では、自己評価と他者評価を比較したレーダーチャート等を用いて自身の特性を客観的に捉え、必要な支援を整理した「自分ノート」を作成しました。さらに、交流学習では障害を環境との関係で捉える「社会モデル」の視点を共有し、全員が参加できるようにゲームのルールを工夫するなど、集団の中で環境を整える経験を積み重ねました。高等部では、キャリアパスポートを活用した振り返りや社会とつなぐサポートブックづくりを通して自己理解を深めました。また、地域での作業販売や現場実習先への具体的な合理的な配慮の提案を行い、生徒が社会の中で主体的に活躍できる環境づくりにも取り組みました。

これらの取組を通して、「自己理解」と「周囲の理解」が相互に作用しながら児童生徒の成長を支えていることが見えてきました。児童生徒は必要な支援を自ら伝え、周囲の支援を必要に応じて受けながら活動する経験を重ねる中で自己肯定感を高めています。また、交流や啓発活動を通して、障害を環境との関係として捉える視点が周囲にも広がりつつあります。

今後もこれらの取組を日常の学習や生活の中で継続し、学校・交流校・地域と連携しながら障害理解を進め、児童生徒が卒業後も社会の中で自分らしく生きていくことを支える環境づくりを進めていきます。


小学部の交流及び共同学習の様子


中学部の交流及び共同学習の様子


高等部の大学販売の様子

## 教育実践総合研究（第54・55号）原稿募集

『香川大学教育実践総合研究』第54号は2026年11月30日（月）原稿受付締切、
第55号は2027年５月31日（月）原稿受付締切予定です。以下投稿要領をご参照の上、奮ってご投稿ください。

**香川大学教育実践総合研究投稿要領**

１（投稿の要領）
香川大学教育実践総合研究（以下「教育実践総合研究」という。）への投稿については、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、この要領の定めるところによる。
２（投稿の内容）
教育実践総合研究は、教科教育、教育臨床など広く教育実践に関する独創的な研究論文・実践報告、資料（研究ノート、研究動向の紹介など）及び香川大学教育学部附属教職支援開発センターの活動報告などを掲載する。
３（投稿者）
教育実践総合研究に投稿できる者は、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、香川大学教育実践総合研究編集会議（以下、「会議」という。）が特に依頼した者とする。
４（投稿原稿の提出方法）
投稿原稿は、完成原稿とし、原則として電子文書で作成し、印刷原稿２部と、その電子ファイルを会議に提出する。
５（投稿原稿の長さ）
投稿原稿の長さは、刷り上がり12頁（１頁は24字×44行×２段）以内を原則とし、偶数頁になることが望ましい。超過する場合は、会議の議を経て認めることがある。
６（刷り上がり１頁目の形式）
刷り上がり１頁目は、和・英文のタイトル・著者名・所属（所在地）、和文要旨（200字）及びキーワード（５語）を含むものとする。
７（投稿原稿の取り扱い）
投稿された論文等は査読を行い、会議においてその取り扱いを次のいずれかに決定する。査読者については、会議において決定する。
（1）採録　（2）条件付き採録　（3）返戻
８（校正）
校正は原則として３校までとし、投稿者において速やかに行うものとする。その際、印刷上の誤り以外の訂正、挿入、削除は原則として認めない。

附則　本要領は、平成16年４月１日から適用する。
附則　本要領は、平成17年12月14日から施行し、
　　平成17年11月９日から適用する。
附則　本要領は、平成19年４月１日から施行する。
附則　本要領は、平成27年４月１日から施行する。
附則　本要領は、令和３年12月20日から施行し、
　　令和３年６月１日から適用する。

香川大学教育学部附属教職支援開発センターニュース
（No.14）
発行日　令和８年10月１日　　代表者　永尾　智
教職の かゆいところに 手が届く。
香川大学教育学部　附属教職支援開発センター
〒760-8522　香川県高松市幸町1-1
Tel.087-832-1683　Fax.087-832-1689
http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/